

インナー大会プレゼン部門 2016 専用企画シート

※電話番号や住所などの個人情報は記載しないでください。

大学・学部・所属ゼミナール名（フリガナ）		
フリガナ）ブンキョウガクインダイガク	フリガナ）ケイエイガクブ	フリガナ）ニッタ トシコ
文京学院大学	経営学部	新田 都志子ゼミナール

※チーム名は参加申込書に記入した名称を記入してください。

チーム名（フリガナ）	代表者名（フリガナ）	チーム人数 （代表者含む）	PPT 動画 （有・無）
フリガナ）ニッタゼミエーハン	フリガナ）ナカノ タクト	6	無
新田ゼミ A 班	中野 拓人		

研究テーマ（発表タイトル）

大学生の障がい者への理解向上に向けて～障がい者スポーツ体験会でつなぐ障がい者と健常者のたすき～

※必ず＜企画シート作成上の注意＞を確認してから、ご記入をお願いいたします。

1. 研究概要（目的・狙いなど）

研究目的は、差別・偏見解消のきっかけとなる理解教育を大学生に対して行うことである。

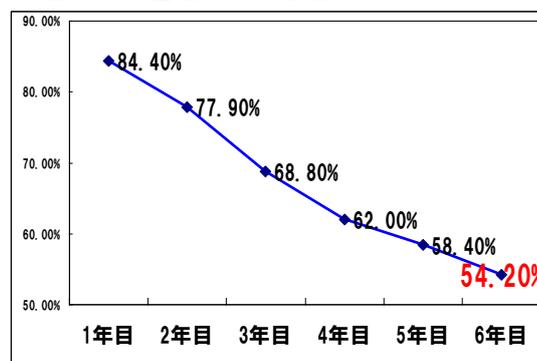
今年の4月に障害者差別解消法が施行された。現在の小・中・高等学校ではこの施行に合わせて障がい者への理解教育が行われているが、大学生には行われていないのが現状である。我々はそこを大きな問題と考え、32回の障がい者と関わる活動経験から、気軽に楽しく障がい者と関わることのできる障がい者スポーツ体験会を大学生に行うことで、障がい者を正しく理解できるのではないかと考えた。

2. 研究テーマの現状分析（歴史的背景、マーケット環境など）

わが国では1949年の身体障害者福祉法の制定をはじめ、2011年障害者基本法制定・改正など、障がい者への差別・偏見問題の解消に取り組んでいる。しかし、内閣府（2012）の調査では「障がいを理由とする差別・偏見があるか」という問いに、89.2%の人が「あると思う」と回答している。また、国内における障害者差別事案の相談件数は年々増加傾向にあり、実際の障がい者の声にも「障がい者だから奇声をあげると言われ、お店の入店を拒否された」といったものが多数存在しており、障害者への偏見は解消されていないのが現状である。

一方で2013年に障害者の法定雇用率が1.8%から2.0%に引き上げられ、雇用されている障害者の推移は年々上昇している。しかし、図1を見ると入社6年後には半数が会社を辞めている。定着率低下の原因について松為信雄氏（内閣府一億総活躍国民会議専門委員）にヒアリングをしたところ、「企業側の物理的配慮と心理的配慮の不足が原因である」、さらに「学生の頃から障害を受け入れ、就労後に障がい者と関わる準備が必要」と分かった。

図1. 障害者の平均定着率（N = 391）



出典：厚生労働省（2013）

しかし、既存の障がい者への理解教育に関して文部科学省へのヒアリングを行ったところ、「小・中・高に対しては理解教育

(疑似体験等)が出来ているが、大学生は未開拓である」ことがわかった。我々が足を運んだ 32 回の活動経験を振り返ってみても、大学生の参加者はほとんどいなかった。

3. 研究テーマの課題

この研究テーマの課題は 2 点ある。

①障がい者を正しく理解するためにはどうしたら良いのか ②既存の活動では大学生へのアプローチが足りていない

①を明らかにするため、我々は文献研究と専門家へのヒアリング調査を行った。既存の研究では、「偏見は相手に対する知識の欠如が大きな原因であると考えられることから、相手と接触する機会を増やし、真の情報に触れれば、偏見はおのずと解消する」(Allport, 1961)。また太田修平氏(日本障害者協議会理事長)は「健常者は障害者との関わりが少ないから混ざり合うことが大事」、小西慶一氏(日本身体障害者団体連合会副会長)も「障がいを持っている人がもっと外に出て、健常な人と当たり前のように会うことが重要。」と述べていた。そこから私たちは、障がい者を正しく理解するには「障がい者の方と触れ合う場を作ることが一つの重要な要素」であると考えた。

4. 課題解決策(新たなビジネスモデル・理論など)

上記の①、②の課題を解決するために私たちが提案するのは、大学生に向けた障がい者スポーツの体験会である。スポーツ体験会にした理由は以下の 3 点である。

- ①、我々の 32 回の活動経験より、既存の取り組みと比べて、スポーツ体験会は体感型であり、一番気軽に参加できたこと。
- ②、高橋、藤田(2013)は、「障がい者スポーツの世界から入っていき、障がいの理解を深めることは効果的である」と述べており、後藤(朝日新聞障がい者スポーツ担当記者)は、「障がい者スポーツ体験を通すと障がい者に対してポジティブな印象で接することができるようになる」と述べていること。
- ③、東京 2020 年パラリンピック開催により、障がい者スポーツに国民の関心が高まっていること。

また我々は、同じ大学生のニーズ(どうしたらこういった取り組みに参加したくなるのかなど)を吸い上げやすく、行政や団体に比べてアプローチがしやすいと言える。既存の活動にも大学生をターゲットにしているものは存在せず、我々の活動の新規性がある。以上のことから大学生に向けた障がい者スポーツ体験会を実施することで研究テーマの課題解決ができると考える。

5. 研究・活動内容(アンケート調査、商品開発など)

我々は 9 月 22 日(木)、25 日(日)の両日で障がい者スポーツ体験会を開催した。体験会の概要は以下の通りである。

ポッチャから学ぶ
everybody chance

日時:9月22日(木)17時半~19時半
後援:日本障害者協議会、文京区社会福祉協議会
参加人数:大学生30名
参加大学:文京学院大学、東洋大学、日本大学など計9大学

ゴールボールから学ぶ
Eye can do it !!!

日時:9月25日(日)11時~13時
後援:日本障害者協議会、文京区社会福祉協議会
参加人数:大学生23名
参加大学:文京学院大学、専修大学、東京工科大学など、計6大学

障がい者スポーツ体験会を開催するにあたってポイントは 2 つある。

一つ目に競技団体の選定である。我々は、より障がい者の気持ちを理解してもらうため、障がい者スポーツ独自の競技であるポッチャとゴールボールを選定した。

二つ目にプログラムの開発である。既存の障がい者スポーツ体験会は、主に「障がい者スポーツ」を知ってもらうためのプログラムであった。そこで我々は障がい者への理解向上のためのプログラム開発を行った。様々な障がい者スポーツ体験会に参加すると「障がい者と話す機会が少ない」「障がい者のアスリート以外の個人の部分を知らない」という問題点があることに気付いた。また当事者 13 名にヒアリングを行っても、「もっと自分たちのことを話したい」というニーズにもあり、参加者と選手のコミュニケーションの場としてトークセッションを設けた。少人数のグループで選手と話す機会を増やし、障がいについての考え方や選手のプライベートをテーマに話した。東京都障害者スポーツ協会様も「トークセッションは競技だけではなく個人、障がい特性を知れることが非常に素晴らしい。他のスポーツ体験会と大きな差別化がされている」と評価頂いた。

今後の課題・展開として、以下の 3 点があげられる。

①活動の継続性 ②規模の拡大 ③資金の確保

①について、我々の活動はゼミ活動として継続することに加えて、学内の学習カリキュラム(科目名:長期フィールドワーク実践)

として継続して行うことが決定した。参加した学生には単位が出る取り組みになっており、今後引継ぎの学生も参加する予定である。②について、活動の規模を広げるために JPTSA（日本理学療法学生協会）と連携した。JPTSA とは全国 10 の大学が所属し、理学療法の情報交換をしている学生団体である。実際に JPTSA の仲地会長とも 4 回ほど打ち合わせをし、専門の企画局を編成して活動していくことが決まった。③について、体験会の費用としてかかる資金面の問題を解決するために、私たちは協賛企業を 8 社獲得した。企業から計 30 万円と T シャツ、飲料などの物品協賛を頂き、今後も引き続き活動継続のための協賛募集を行う。



9月22日ボッチャ体験会の集合写真

6. 結果や今後の取り組み

参加者の体験会後の意識の変化を測るため、体験会前と体験会後のアンケートを実施した。結果は体験会前と体験会後と比較すると、「かわいそう」「自分とは違う人」というイメージが下がり、「普通の人と変わらない」というイメージが上昇した。つまり、障がい者も自分たちと変わらない人という認識を持てる人が多くなった。一方、「不自由なことが多い」という項目では、体験会前はほとんどの人が思っていなかったが、障がい者と同じ状況を体験したことで不自由であることが分かった。このことから、障がい者は自分たちと同様な面もあるが、障がいがあることによる問題を抱えていることが実感できた。

体験会の最後に参加者に気持ちの変化を書いてもらった「一言宣言」でも、ほとんどの参加者が「相手の立場になって考える」、「進んで手助けしたい」などを宣言していた。また選手からも「実際にスポーツを通して接することでお互いを理解出来た」、「競技のことやプライベートのことを学生と話すのは楽しかった」等の意見が上がった。

このことより、今回の障がい者スポーツ体験会を通じて大学生へ障がい者を正しく理解してもらおうという目的はほぼ達成できた。

今後の取り組みは、まず来月の打ち合わせで、体験会マニュアルや購入した備品等の引き継ぎを行う。来年の 3 月 12 日（日）に東京工科大学で JPTSA と合同でゴールボールの体験会を行うことが決定した。2017 年は体験会を年に 4 回（文京学院大学、東京工科大学、名古屋大学）、2018 年は年 6 回と規模を拡大する予定である。

7. 参考文献

G.W.オルポート（著）、原谷 達夫（翻訳）、野村 昭（翻訳）「偏見の心理 単行本」『古書』（1968）

伊藤数子「ようこそ、障害者スポーツへ～パラリンピックを目指すアスリートたち～」(2012)

中川 喜代子「偏見と差別のメカニズム」『人権学習ブックレット』（1998）

藤田紀昭「日本の障害者スポーツ～スポーツの魅力と楽しさ～」（2001）

Winch, R. F. 「Mate-selection: A study of complementary needs. New York: Haoer & Row」 （1958）

「平成 27 年障害者雇用状況の集計結果」<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000105446.html>

インナー大会プレゼン部門実行委員会への連絡事項

<企画シート作成上の注意>

※本企画シートは審査の対象となります。

※本企画シートは、「日本語」で書かれたものとし、1 チーム・1 点提出してください。

※本企画シートの項目に沿って、ご記入をお願いいたします。各項目に文字数制限はありませんが、1~7 以外の項目を追加することは「不可」とさせていただきます。

※本企画シートは、インナー大会プレゼン部門実行委員会への連絡事項と企画シート作成上の注意を含め、3 ページ以内に収めてください。実行委員会から審査員に渡す際は、A4 サイズでプリントし、3 ページ目までをお渡します。

※大会参加申込み時点から、「参加メンバー」の変更があった場合、上記「インナー大会プレゼン部門実行委員会への連絡事項」に記入してください。なお、参加申込書提出時からのチーム名変更は「不可」とさせていただきます。

※企画内容は、未発表の（過去に他誌・HP などに発表されていない）ものに限り、学校内での発表作品は未発表扱いとなります。

※商品写真、人物写真、音楽などを掲載・利用する場合、必ず著作権、版権の使用許諾を得てください。日本学生経済ゼミナール関東部会・日経 BP 社・日経 BP マーケティング社は一切の責任を負いません。

※書籍や新聞等の文献から引用した場合は、出典先（使用した文献のタイトル・著者名・発行所名・発行年月など）を明記してください。統計・図表・文書等を引用した場合も同様に明記してください。また、Web サイト上の資料を利用した場合は、URL とアクセスした日付を明記してください。

※電話番号や住所などの個人情報は記載しないでください。